
純情エモーション

佑川芭瑠堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純情エモーション

【Nコード】

N1134H

【作者名】

佐川芭瑠堵

【あらすじ】

私はM大に通う大学2年生。文学を専攻に就いてるので、宮城教授やヒロちゃん事上条副教授？wだっけか？（↑）と仲がいいかな。よく部屋とかに遊びにいたりする。そんな私の純情なエモーション（感情）物語。

a c t . 1 (前書き)

原作とは、ちょっと時間の差がでてますが

お気になさらずに読んでいただけるとありがたいです。

主人公は、オリキャラで

オリジナルストーリーー満載なので

それに嫌悪感を持たない方のみ読んでくださいねv

a c t . 1

「宮崎きょーじゅー！」

「ああ、佑川か……」

いつもの様に私は教授たちの部屋に立ち入る。

「しかし……お前……こんなところに良くもまあ、毎日遊びにくるよなあ……」

「えへっだってさあー……こっつて宝の宝庫だからね」

「そんな事を言う奴は、きっと生徒の中でお前だけだろうっよ……」

また呆れられる。

いつもの事だけど」

「何冊か借りてっいいい？」

「そっちの奴だったらなー」

「こっちの芭蕉のヤツがいいなー」

「お前なー……大切な資料なんだから触るな！」

パコッ

「いったーあい……」

本で叩かれたああ……！
ぐずつ。

「地味に痛いですうー教授の馬鹿ア……！」

「佑川が言うことを聞かないからだろう……」

「ぶう……」

拗ねてみる。

「はあ……まったく、お前にはかなわんよ」

「えっへへっ」

こんなやりとりがとてつもなく好き。
宮崎教授も好きだけど……。

「只今、もどりましたー……」

「あwヒロちゃんだあゝおかえり」

「って、またお前か……」

「また私ですがっ」

「おまえなー……その”ヒロちゃん”をどうにかしろー!」

「いーやーでーす」

「佑川……!!」

「ただでさえ、鬼の上条なんですから
可愛くないかね」

「誰も可愛さなんぞ求めてない!!」

「そうやってすぐ怒鳴るから、生徒たちに怖がられるんですってば
」

「いいんだよ。舐められるよりましだ!!」

「えー…せつかくヒロちゃん、可愛いのに…」

「あ、アホか!!!!」

「にやはは…可愛いよっ」

「黙れ!単位、やらんぞ!!」

「こんな真面目な生徒捕まえてよく言うよ…っっ」

そんな日常が楽しかった。

なのに、続かない……現実の辛さ。

「おっじゃましてまーす」

「まったく……部屋まで来るとは」

「ヒロちゃんと仲いいもんねvv」

「だまれ!!」

「ほーいっ」

そんな返事を返しながら、辺りを見回した。

男の人の部屋ってこういうんだー……と眺めていた。

「まったく彼女でも作りなよ」

「うるさい」

「しょーがないから、片付けてやろう!」

「はあ?!」

腕まくりして、掃除開始！

「お前、教わりに来たんじゃないのかよ？」

「教わる駄賃？みたいな感じかな？
ただでさえ、貴重な休日を頂いてますからね？」

「そんなん……気にしないで良い」

「（可愛いなあ……ヒロちゃん）」

なんて言葉を言ったら貴方は怒るだろうからやめるケド！！

「あ、この本！

せんせーも好きなんですか？！」

「ああ？」

私は手に例の本をとって、ヒロちゃんに見せた。

それが”始まり”だったの力モ

「これ、私大好きなんだ〜
作家さんも好きーvvv」

私が手に取ったのは「宇佐見秋彦」という著者の本。

ヒロちゃんの本棚には、3冊づつ大事に保管されていた。

他の本なんて積まれているだけだというのに。

よっぽど、この著者の人が好きなんだなって思った。

「まあ…な」

「そういえば、この著者さん

「大卒業生なんだーもしかして知ってる人??」

「…そいつと幼馴染」

「すっごいー!」

ねえねえ、今度紹介してよーーヒロちゃん」

「誰がするか!!」

「けち」

いつものように、叱られて拗ねるというお決まりなパターン。
だけど、いつもと違っていたのはこの後。

「アイツには……好きな”男”がいるしな……」

「……え?!」

「……ッ?!(やべっ)」

口に手を当てても遅いおそい……!!
もうただ漏れてますよー。

「ほほう。そういう事ですか……」

「何がだ」

「宇佐見という人物をヒロちゃんとっても愛していました」

「お、おまつ!?!」

「けれど、その宇佐見さんには好きな”男性”がいました……」

「……めろ」

「ヒロちゃんの淡い恋は終わりましたとさw」

「やめろって言うてんだろ?!」

「えっ……」

「パンツッ!」

「ヒロちゃん……?!」

ああ、私は……。

何ていう、デリカシーの無いことを言ってしまったんだろうか。

「……だまれ、黙れ!!」

「ごめ……ヒロちゃっつ」

「……ハハッ、てめーをココで犯しても良いんだぜ?」

「ヒロちゃ……っ?」

ヒロちゃん。

上条副教授せんせーさまは……。

私に……。

とても、深いキスをお与えになりました……。

私は別に嫌だとは感じませんでした。

けど

やった本人は、泣いていました。

私の頬に

いくつもの涙を

零^{こぼ}しました。

きつと、寂しかったんだと思います。

誰にもわかってもらえずに。

本人にも気持ちが伝わらないで……。

ずっと、1人で……。

耐えてたのだと思います。

だから、私は怒る気すら沸かなかったんだと思います。

……だから私は!!

この人を守ってあげたいって

思うようになったのかもしれない。

a c t . 1 (後書き)

ちよつと、原作とは違ふ点が多いですが
気になさらないください。

原作を重視するようには努めます!!

訂正

えと、途中経過により

原作のCPは完全無視です!

ストーリーは同じようには進めていきます。

まあ、CPがまったく違うので大分違くなりますケド

a c t . 2 (前書き)

純情ロマンチカのオリジナルストーリー小説です。

完全なるオリジンなので、原作が好きな方は見ないでください。

C P もぜんぜん異なります。

B L 物をN Lにしたので大丈夫だと思いますが

B L 嫌いは回れ右!!

a c t . 2

「どうしたのよー佑ちゃん！」

「ええーそうかなあ……」

「そうだよーどうしたの??」

二人の友人に言われて、初めて気がついた。

トイレに行って鏡を見ると、酷い顔があった。

あの日を境に私とヒロちゃんの関係はガラッと変わってしまった。

身体だけを求めている。

あいかわらず、行為が終わるとヒロちゃんは必ず泣いている。

後悔後先たたず。

そんなヒロちゃんをずっと撫でてあげる。

彼が泣き止むまでずっと……。

「うつ……」

ある日、突然吐き気が襲ってきた。

何だろう……初めて経験する急の嘔吐感。

トイレに駆け込んで、胃のものすべて吐いてしまう。

「……もしかして」

これは……??

「ふう……これは妊娠ですね」

「そ、そんな……」

私の中に、ヒロちゃんとの赤ちゃん。

嬉しいような、悲しいような……。

複雑な心境。

「どうしますか？」

……と、今言われても決めかねるでしょうね」

「はい……」

「彼氏さんとも相談してみてはどうですかね？」

「……言える分けないじゃない」

病院から出て私は呟いた。

ヒロちゃんは……何でも話せる仲だケド…。

こんな話なんて持ちかけられないよ……！！

「もう……やめよう」

「あ………」

こう言い出すしか無かった。

ヒロちゃんも気付いたらしい。

この関係はマチガイだって言うことを……。

「……今まで、悪かった……ありがとう」
「うん」

バタンッ

「……俺もどっにかしてるぜ………」

「…………これで良かったのよ……」

涙を抑えて抑えて…堪えて……。

でも、涙は止まってくれなくて……。

私は公園？のベンチで座って、治まるのを待つ。

なかなか治まる気配は無い。

どうしようか……。

ひゅるるる——

「……?？」

ズドオオオオオオオン!!!

「にぎやあああああああああ!?!?」

な、ななッ!?

何なの?!

「すみません。こっちに飛んできませんでした……か?」

「うえ…?？」

「……………」

「…………!?!?!?」

不味い?!

な、泣いているの……

身知らずの人に見られたああああ?!?!?!?

ああ…………弱ってる姿なんて、他人に一度だっ
て見られたことないの……。

そつですよ!根っからの負けず嫌いですよ!!

「ちょっといいですか…………?」

「え、ちょ…?!」

急にさつき訪れた男の子（といっても、私と同じくらい？）は

私の腕を引っ張って何処か連れて行くこうとする。

いつもなら、引っ叩いて「何すんじゃぼけええ!!」って言うんだけど。

今は何も抵抗する気力すらわかない。

でも……。

「ちょ、アンタ…何処に連れてくつもり?!」

「俺は、草間野分っていいいます。」

「いや、名前も大切だケド…!!」

「……………」

その後、だんまり。

「お、わっちゃん！ロケット見つかったかい？？」

「おおー新入り連れてきたのか！
しかもべっぴんさんじゃないか！わっははは」

「お譲ちゃんも一緒にろけつとやろうや！」

なんなの！？いったい……。

今回、新たに出会った”草間野分”という同じ年くらいの男の子。

一体何者???

a c t . 2 (後書き)

読んでくれてありがとうございます^^
良かったら続きもお楽しみに!!!

a c t . 3 (前書き)

純情ロマンチカのオリジナル小説です。

C Pなどが異なっている上に

原作の流れなどがまったく無視されています。

♂ X ♀
です。

a c t . 3

それから、私は意味分らないおじさま達とロケットで遊んだ。
くだらない……なんて、思ったのは最初だけで
いつの間にか……

一緒になって、子供のようにはしゃいでいた。

「いやあ、お嬢ちゃんもなかなかやるなあ」

「今時の子にしては、根性あるわい！」

「えへへ〜そうですかあ？」

何時の間にやら仲良くなっている、おじさまと私。
そして……。

「美夏さんっ！」

「えっ…きゃッ?! 冷たい!!」

「驚きました？」

野分くんは、みんなの飲み物を買ってきてくれたのだ。
……だからって、こんな演出いらないよう。

「もう！野分くんったら」

私はしょうがないなあ…なんて

今日知り合った男の子とまで仲良くなっていた。

「…て、あれ？

名前教えたっけ？？」

「え…っと、内緒です」

「ええー！」

なんじゃそりや〜。

「若いつて良いの」

「だなあ」

ちよとお！！

誤解してないおじさま達？！

「べ、別にそんな…っ」

「照れなくても良いぞ!」

「良いんじゃない、言わなくてもわかる!」

「やっぱりわかります?」

「ああ! わかるとも! わっちゃんにも春がきたくらいなあ」

おい!!

野分。

お前まで乗ってどうするうううう!!

「ま、いつか……」

別に悪い気はしない。

野分とだったら……って!??!

何を考えてるんじゃない、自分!!!

「……少しは元気でましたか?」

「え?」

「だって、その……泣いていたでしょ?」

「え、あ……そうだった……ね」

すっかり忘れてた。

今日まで、辛くて辛くて……。

あの”関係”が頭を離れることなんてなかった。

ヒロちゃん……。

「ごめんなさい。また……そのう……思い出せてしまって」

「う、ううん！

気にしてないよ！！

ぜんぜんっ」

寧ろ、ありがとうなんだよね。

忘れさせてくれて。

気を使ってくれて……。

「実は、知ってるんです

なんで美夏さんが泣いているか……」

「……え……？」

さすがに驚いた。

だって、何で今日あった人が……。

顔を見る限り、うそは付いていないみたいだし。

なんで??

「実はヒロさんに相談されて
えと……美夏さんとの関係」

「な、なんだ………そつかあ」

な、何なんだろう。

悲しいような、辛いような。

良くわかんない感情に揺すぶられてる……!!

「……ちよつと、場所を変えましょうか」

野分くんの配慮で、おじ様たちとは別れた。

最後に名詞を貰って……。

社長

株式取締役員

幹部

おじさんたち、いったい何者???

「そっか……ヒロちゃんと友達なんだ」

「はい、かなり強引になりましたが」

「だよねえー……」

ヒロちゃんから友達を作るなんてあんまないしてか、ありえないし」

「酷い言われようですねえ」

だつて、本当の事だ。

ヒロちゃんは自分と他人の間に壁を作る。

そう、一定の距離を保てるために。

その理由は、抱かれて付き合ってみてわかった。怖いんだよね？きつと……。

「それで、相談されて……貴女のことを知りました」

「そっか…」

馬鹿な女つて思ったでしょ??はは……」

乾いた笑いしか出来なかった。だつて、自分に余裕がない。

「そんなことはありません！

美夏子さんは、聞いている限りですが……素敵な女性だつて事がわかりました」

「そ、そんなこと……」

「あるんです!!」

野分くんは、結構強情なところがあるようだ。
有無を言わせないというか、なんというか……。
人を納得させる事に長けているのは分かった。

「……ヒロさんは、美夏さんの事が好きなんですよ」

「ま、まさか……そんなことないって」

そう言われて、あせる。

だって抱かれる切欠は、あんなものだったんだ。
だから、ヒロちゃんが私のことを好きはなはずがない。
身体だけの関係だもの。。

「泣いている……という事は
振ったんですね？ミカさんが……」

「そ、そう……だよ？」

泣きそうになって呻きそうになって……。
我慢して、私は肯定した。

「理由は……聞いて良いですか？」

「いい…よ…?」

何故だか分からない。

今日あったばかりの人にこんな話をして良いかどうかとか。

そんなこと、今は考えてなかった。

否、考えられなかったんだと思う。

とにかく、自分を分かった欲しい。。。

それだけだった。

「あたし……子供が出来たの………ヒロちゃんの子………」

突いて出た言葉は………真実を語っていた。

act 4 (前書き)

純情ロマンチカのオリジナル小説です！

しかも、原作まったく無視のうえ

CPまでまったく違いますのでご注意をVV

オリキヤラも出てきます♪ & a m p ; # 9 8 3 5 ; & a m p ; # 9 8 3 3 ; & a m p ; # 9 8 3 6 ;

「……そんな……?!」

驚くよね。

うん、普通は……。

だって、今さっき別れた男の子がお腹に居るんだもん。
しかも……自分が振った、ヒロちゃんの子供。

「……ヒロさんにこの事は??」

「……言っていない」

だって、言ったらヒロちゃんがまた泣いてしまいそうだから。
人一倍責任感があるヒロちゃん。

きつと……自分が責任を取るって言ってくれるだろう。

でも、そんなので……たとえば、結婚してもお互い辛いだけだと思う
の。。

だから……だから……。

「言え……なかつたんですね……?」

「うん」

私は、ヒロちゃんが好き。
ううん、寧ろ大好きなんだ。

だから、これ以上……苦しめたくないよ……ッッ！

「わかりました」

「え……??」

な、に……が???

私は頭が回らなかった。

彼、野分が何をわかったのだと言ったのかを理解できなかった。

次の言葉に驚愕を覚える。。

「ヒロさんには、何も言いません……」

「そのかわり……俺が美夏さんを貰い受けます！子供も！！」

彼は何を言い出すのだろう……

友達の彼女が孕んだのを知って……

なぜ、友達というだけの彼が……

子供も引き受けるというのだろうか？？

ますます混乱してくる私の頭。

いったいどうしてくれよう……。

「ちょ、ちょっと待って…!!
何でそんな話に飛躍するの……」

ちよつとどころか、かなり頭が痛くなってきた。

先ほどよりは、冷静さを取り戻してきた。
だから、余計に野分が言った事の重大さに頭を抱えなくなる。

「俺は本気です…!!
まだまだ、ひよつこだけど
美夏さんと子供くらい養えます」

「いや、だから!
どうしてそんな考えに至るの?!」

「それは、決まっているじゃないですか……」

野分は、この日最高の微笑みで私にさざりと言った。

「美夏さんが、好きだからですよ?」

もう、これ以上……頭痛の原因を作らないでくれ。

そう願うばかりだ。

野分と付き合うつと、それすら適わない気がしてきた。。。

……だ……けど……不思議と……

「じゃあ……不束者ですがお願いしますっ」

なんて、返してしまう私も相当……馬鹿かもしれない。

けど、それで良い気がする。

だって、野分だから。

確信がないというのに、こう思わせてしまう野分は。

凄いんじゃないかと思う。

「ひーろー！ーさあああん！」

「うおわあ？！ー！」

「相変わらず元気がいいなあ、佑川は……」

こうしてまた、前のようになれたのも。

全部、野分のおかげだ。

「ん？そつえばお前。」

「なあに、ヒロさん」

「お前……最近、変わったよな……」

「……うん、
♪今、幸せだからさVV
」

こう、返せる幸せな時間。

取り戻せた、前の幸せ^{はつしやう}+

とっても、楽しいよVV

a c t 4 (後書き)

あと、1、2話で完結します）、
、
●
（

a c t . 5 (前書き)

純情ロマンチカのオリジナル小説です

a c t . 5

「野分先生、お呼び出しです」

「誰かな？」

「早く行ってあげてください！」

野分はこの数年で、飛躍的に伸びた。
もうこの病院を任せられるくらいに。
。

そして、訪問者とは……。

「はあ、」
「くく」

「……弘明！」

トテトテと、危なっかしく歩いてくる弘明という子供1人。
その後から追うようにして、小走りする女性。

「ヒロ！」

駄目じゃない、病院内で走っちゃあ」

「あ、ごめんなしやい……」

「分かれば良いのよ？」

ヒロはちゃんと謝れてえらいねえ？？」

「えへへ」

訪問者は、野分の最愛なる妻の美夏子と……。
そして、息子の弘明だ。

「美夏さん、来てたんですねっ」

「うん、弘明がどうしてもパパの仕事姿を見たいって言うから」

「美夏さんは？」

「え？？」

「俺に会いたかった???」

「もう！野分ったらっ!!」

「照れるじゃないッ」と、バシバシ叩きながら言う美夏子。
そんな恥らう(?)美夏子が大好きな野分。

「あ、そうそう！

お昼持って来たのっ」

良かったら一緒に食べない??」

「食べよーよーぱぱあ」

「まあ……忙しく……なかったらね!うん!!」

そういえば……と、野分は思った。

最近、夜も仕事詰めで弘明と食事を取っていなかった。

もう少しでお昼休憩だし、それでも良いなと思った。

「わかった。

じゃあ、中庭あたりで待ってて?

すぐ、行くから」

「やくそくだよあ?ぱぱ!」

「うん、やくそく」

「「ゆーびきりいげんまん」
うっそついたらはりせんぼんのーますっ！
ゆびきつた」」

「じゃあ、野分。待ってるわね」

「ままゝ行こう！」

「はいはい」

美夏子は、また先に行きだした弘明を追おうとした。

「美夏さん！」

「なに、のわk……?!」

chu

「の、の、野分?!?!?」

「ちょっとお先に」

「病院内でしないでよう」

相変わらず、ラブラブなお二人なのでしたv

E
N
D

act・5（後書き）

最終話ですが、

ちよっと、おまけでもう一話^^

よかったら、次もお読みください♪

おまけ 純情チルドレン（前書き）

純情ロマンチカのオリジナル小説です！
しかも、未来編という訳で色々違います。

そして勝手に息子まで仕立て上げて…。
んで、やっぱり最後はBLで締めます

おまけ 純情チルドレン

「おーい、弘明！」
ひろあき

「あ、七海」
なつみ

二人は大の仲良し
親同士が仲が良いかららしいが。
二人には関係ないようだ。

相性抜群な二人。

「今日、うちに寄ってくだろ？」

「おじさん居るの??！」

「親父？
いるんじゃないの??」

「んじゃ、行く」

「お前、ぜってー変だつて！」

「何が??」

「俺が言つのもなんだけど

うちの親父、大学じゃあー鬼教授だのなんだのって
有名で、人が近づかないらしいし」

「おじさん、可愛くて好きだけどなあゝ」

「そんなん言つの、うちの公雄くらいだよ……」

七海の家は、ちょっと複雑な家庭だった。

親父の弘樹と、妻役と言つ名に伴侶が公雄だ。

もちろん、名前どおり男だ。

美人で優しいし料理上手だし、妻の鏡とも言える位だが
いかんせん、やっぱり男だ。

日本と言つこともあり、契約上は結婚していないが
もう夫婦みたいなものだった。

そんな訳で、七海はその公雄の連れ子という訳らしいので。
実際の話は弘樹とは血が繋がっていない。

「なんだよー七海

母ちゃんって呼んでやらねーの??」

「なんで、男に向かつてかあちゃんなんだよ……」

「公雄さん、美人じゃん!」

「かんけーねえよ」

そういう家庭事情も何のその。

弘明はまったく気にしていなかった。

「んじゃ、3時ごろ行くな！」

「おう！！」

約束して左右に別れて帰る。

「弘樹さん……かあ………」

七海のお父さんと呼んみる。

弘明は、知っていた。

自分の本当の父親が弘樹さんだと言っ事を。

でも、親が知ったら困らせてしまう。

だから、言わないし気づかない振りをする。

だから

だから……

七海の父親として……接しなさい。

ピンポン♪

「こんにちはー！」

呼び鈴をならして、上條家来た。

出てきたのが、そして。

「おお、弘明か」

「こ、こんにちはー！」

「こんにちは」

やったあゝゝと内心、飛び上がりたいくらい！たまらない気持ちになる。

「上がったけ

今、七海呼んでくるから……」

「あ、はい」

ちょっとした、幸せってこういうんだなんて

弱冠12歳で感慨深く思ってしまう弘明だった。

「おう！待たせたな」

「だいじょーぶだよ」

「なんだよー機嫌良いなあ
そんなに好きなの？親父のこと」

「う、うん…v」

「変わり者だなあーあんな鬼親父…つてえええ…！！」

「誰が鬼親父だ？ああ？！」

「こっというのが鬼だつて言ってるだろ！！」

始まる親子喧嘩。

羨ましくてたまらない。

別に今の父親に文句があるわけじゃない。
今の父親、野分もとっても大好きだvv

……ただ、現実を知るまでは…だ。

嫌いになったわけじゃない。

ただただ、この人の息子じゃないんだって思うと胸が痛む。

「野分さんの息子さんだけあるわあ」

「お医者様の息子さんだもの！」

……そう言われたら、頑張るしかないじゃないか。
でも、実際に流れている血は弘樹の血筋で。

「あ、親父！」

こいつまた、作文コンクールで金賞取ったんだぜ！！」

「へえ、凄いな！！」

さすが、佑川の子だなあ」

「あ、そういえば親父の教え子だっけ？」

美夏子さんって？？」

「あいつなあ」

文学という文学を読みまくってたやつだから
読解能力？は長けてたんだが……書くのは苦手だったなあ」

「へえ、そうなんだ」

「だから、鳶が鷹を生んだってやつだな！」

「失礼だつてー！！
なあ、弘明？」

「や、別に良いと思うし」

「おいおい、お前もかよっつ」

そう、母親は文章能力は無かったのだ。
この俺が今持っている筆記力はたぶん、いや、明らかに父親譲りだ。

「あ、おい！茶あー切れてるんだっ
七海買ってこいよ」

「はあ？親父が行けばいいじゃん！！」

「俺は弘明と遊ぶんだ」

「サイテー！！」

はあ、仕方ねえなあー
変な事したらただじゃおかねーからな！！！！」

「へーへー」

と、買い物に行ってしまった。

「あちいからなあ、今は氷水で我慢してくれな？」

「あ、はい！」

カランツと氷が溶けて音が鳴る。

「文学の道は考えてるか？」

「え、あ、はい！」

いちおー文学が学べる所へ行こうかと……」

「そっか！」

じゃあ、大学はウチに入れよって…まだ、早いかな」

「いえ！！」

えと、大学はそこって決めてて……」

「そーかそーか！！」

それは嬉しい話だなっ

近頃は、ロクな奴しか入ってこなくてなあ」

「ははっそうなんですかあ？」

弘樹さんと話すのは楽しい。

七海が聞いたら、また変な顔をされるが。

俺は母親の影響もあって、文学に興味を持っている。

今はジャンル関係なしに読み漁っていて……。

もう、小学校の図書室の本全て読破している。

今度は市立図書館に挑戦中だ。

だから、本の話とかで盛り上がる。

とっても楽しい時間。

大切に、貴重で……。

「そっぴゃ、美夏子……元気にしてるのか？」

「はい！凄く元気ですよ♪」

「そかぁ……なら、良いがな」

そうやってたまに切ない顔をする。

美夏子と呼ぶときがたまにある。

ほんのわずかだが、そういう風に呼ぶときは必ずこっぴど顔になる。

「さあて、そろそろ帰ってくるかな？」

「あ、俺が見てきま……痛え……わわぁあ！？」

「あぶねー！」

トサッ

「（……あ）」

急に立とうとして、自分の足が痺れている事に気がつかなかった。
その結果、こけそうになって……。

「大丈夫か？」

「あ、え、あああ………すいません」

「別にかまわねえケド………立てるか？」

「ずいません、立てません」

情けないことに、痺れが半端なくて動かせない。
うう、本当に情けない限りだ。

「じゃあ、しばらくこうしてる？」

弘樹さんに抱きしめられるような形になってしまつ。
動きたくても足が言うことを聞いてくれない。

「で、でで、でも………
悪いですうう」

「気にすんなってっ
しょつと」

俺の脚を気遣いながら、向きを変える。

これじゃ、後ろから抱きすくめられてるじゃん?!?!?!?
あわわわわあわわあわわあわ!!!!

「(……でも、すごく良いカモ)」

こうして、本当の父親に抱きしめられるのがずっと夢だった。
もっともっと寄り添いたい。
甘えたい。

……無理なのは百も承知だ。

この瞬間を大事にしたい……。

「足、平気か？」

「だ、だいぶ……」

「マッサージしてやろうか??」

「い、いい、いいえ！」

「そんな、滅相もないっつ」

「遠慮すんなって！」

「最初はいてーかもしれねえが……我慢な？」

「……痛あ……う」

「どうだ？少し良いだろ？？」

「は、はい……はう?!」

「まだ、駄目か……これは？」

「だいぶ……気持ちいいですっ!!」

「そか、良かった」

まさに夢心地♡

そこへ……

「親父！！何やって……あれ？？」

「あ、お帰りい」

「おお、ずいぶん遅かったな」

「何やってるかと思えば、何やってんだよ？！」

「離れる！！」と、べりつと弘樹さんと俺は引き剥がされる。
ああ……いいところだったのに！

その代わりに……。

ぎゅううう。

「え？七海？？」

「変なことするなって言っただろ！！」

なんで、抱きしめられてるんだ！？
今度は七海に！！！！

「してねーよ」

「した！見たぞ！！」

「足をマッサージしただけだろうが」

「抱きすくめながらしなくても良いだろ！！」

この後、しばらく親子喧嘩中……………。

「——だからあ、こついう訳なんだよ!」

「なあんだ……ほっ」

「（何の安心なんだよ）」

「あ、俺の部屋で遊ぼつぜ?」

「うん、いいよー」

パタンっ

「我が息子ながら、可愛い所あるもんだな♪」

「ねえねえ、何でさっきさあーおじさんに怒ったの？
するわけないじゃん、へんな事なんてさ！あははっ
っ
」

冗談半分で言った。
それだけなのに。

「……嫌なんだよ、お前が……たとえ親父でも」

「何が嫌なの??」

「お前が他の奴に触れてることだよ！」

「わっ！？」

バサッ

押されてベッドの上に倒れる。

すぐさま、両手を上に、七海の腕一本で拘束される。

こ、こんなに力強かったけ？！

「ど、どういう事だよ……！
なっm……ンッッ！！？」

講義しようとした口は、すぐさま七海に塞がれてしまった。

「……いう事に……き、決まってるだろ!!」

「と、言われても……ええ！？！？！？」

やっと、頭に入ってきた。
それってつまり……。

「お前が好きなんだよお!!」

大親友に告白されてしまいました。

E
N
D

おまけ 純情チルドレン（後書き）

ここまで、読んでくれてありがとうございます!!
これで、純情エモーションは終了です

最後で次回作予告をしました。

まだ、書くかどうかは微妙です。

でもでも、いつかは書きたいと思いますので
どうか、その時はまたお付き合いくださいませ〜♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1134h/>

純情エモーション

2010年10月10日19時29分発行